

【25】

氏 名（本籍）	左 ^さ 藤 ^{とう} 敦 ^{あつ} 子 ^こ （石 川 県）			
学 位 の 種 類	博 士（教 育 学）			
学 位 記 番 号	博 甲 第 3572 号			
学位授与年月日	平成 17 年 1 月 31 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審 査 研 究 科	心身障害学研究科			
学 位 論 文 題 目	聴覚障害児における動詞の使い分けに関する実験的研究			
主 査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	四日市	章
副 査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	前 川	久 男
副 査	筑波大学教授	学術博士	斎 藤	佐 和
副 査	筑波大学助教授	博士（教育学）	茂 呂	雄 二

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

聴覚障害児を対象とした動詞に関する知見や言語指導の実践の中で、聴覚障害児は「割る」「刈る」などの動作が及ぶ対象に応じて使い分けられるべき動詞の代わりに、「切る」という一つの動詞を多用する傾向にあると報告されているが、その詳細な特徴などは明らかにされていない。本研究では、様々な対象に用いられうる動詞（以下、包括動詞）と特定の対象に用いられる動詞（以下、限定動詞）の観点から、聴覚障害児が文脈に応じてどのように動詞を適切に使い分けしているのかを明らかにし、得られた知見から効果的な言語指導に資する資料を提供することを目的とした。

（対象と方法）

本研究では、聾学校小学部 3 年生から 6 年生及び中学部の学齢段階にある聴覚障害児にみられる動詞の使い分けの特徴について、通常学級の小学校 4 年生から 6 年生の健聴児及び健聴成人との比較を通して検討を進めた。第 3 章では、動詞の産出に関わる検討を行うため、空所に適切な動詞を補充する課題を用いて、一般動詞と心的動詞の産出の特徴と、文脈による差異が動詞の産出に及ぼす影響に関して明らかにした。第 4 章では、動詞の理解に関して検討を行うため、動詞と名詞で構成される 2 語文の正誤の評定を求める課題、及び条件を統制した動作場面をビデオ呈示し、動作表現に適する動詞の選択を求める課題を用いて検討を行った。

（結果及び考察）

動詞の産出については、具体的な動作を示す一般動詞では、聴覚障害児も、学年に伴って、健聴児と同様に対象に応じて種々の限定動詞を産出するようになっていく傾向がみられるものの、動詞によっては、文脈に応じた適切な限定動詞を産出することが困難であり、包括動詞の産出に依存する傾向が強いことが明らかとなった。また、一部の動詞に関しては、健聴児よりも限定動詞の産出が少なく、限定動詞の産出の多寡が健聴児と異なっていることが示された（第 3 章第 1 節）。同様に、内的な状態を示す心的動詞についても、聴覚障害児は、健聴児では産出されない限定動詞を回答しており、限定動詞の微妙なニュアンスを文脈に応じて使い分けしていないことが示唆された（第 3 章第 3 節）。次に、文脈の違いが動詞の産出に及ぼす影響につい

て検討したところ、聴覚障害児も健聴児と同様に、目的語となる名詞にの違いに応じて限定動詞の産出に多寡が生じることが示された。しかし、回答された動詞の種類の違いから、聴覚障害児にみられる動詞の使い分けの困難さには、包括動詞を多用する側面に加えて、限定動詞を固定的に用いる側面もあり、文脈に応じて柔軟に動詞を産出していないことが窺えた(第3章第2節)。

一方、限定動詞産出の基礎となる、限定動詞の理解について、文の正誤判断課題を通して検討したところ、限定動詞を産出できた聴覚障害児は、健聴児と同様に、限定動詞と目的語との関係を捉えていることが示された。また、限定動詞を産出できなかった聴覚障害児も、健聴群で明確に正誤の評定がなされうる動詞と目的語との関係は適切に捉える傾向がみられた。しかし、語の理解が不完全な状況にあり、発達途上にあることが示唆された。また、聴覚障害児と健聴児、健聴成人との間で、各課題文に対する正誤評の定割合に高低差があるものもみられ、生活環境などの違いから動詞の意味を構成する属性を特定化していく着目点が聴覚障害児群と健聴児とで異なっていることも窺えた(第4章第1節)。さらに、どのような点に着目して動詞をラベリングするのかについて検討したところ、限定動詞を産出している聴覚障害児であっても、健聴成人よりも広い範囲で各限定動詞の概念を捉える傾向がみられ、より分化された意味として、各限定動詞を構成する意味属性が十分に形成されていないことが示された。また、包括動詞の選択率から、健聴成人は、条件に適する場合、包括動詞や限定動詞を柔軟に選択しているが、聴覚障害児はどの条件に対しても包括動詞を選択する傾向がみられ、文脈に応じてより適切な動詞を用いることが困難であることが明らかとなった(第4章第2節)。

(まとめ)

以上のことから、聴覚障害児が文脈に適した動詞を産出することが困難であるのは、(1) 包括動詞よりも精緻化した意味をもつ限定動詞を習得していく過程、(2) 限定動詞を習得した後に、様々な文脈が示す微妙な意味の違いに対応して、限定動詞の意味の精緻化を進める過程、(3) 新たに習得した限定動詞の意味と対比させて、既に習得した包括動詞の意味を精緻化していく過程、などが十分に機能していないためと推察された。本研究で扱った日常生活レベルの動詞は、様々な場面における語の使用経験を通して、習得及び意味の精緻化が進むと考えられる。

従って、聴覚障害児に対する言語指導及び支援の際には、新たな語として限定動詞の獲得を拡充させるとともに、既に習得した包括動詞と限定動詞の意味を精緻化するために、これらの動詞が用いられる文脈の相違が明確となる場面設定及び教材の選定が重要であると考えられる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

従来、聴覚障害児に関する動詞獲得研究は、基本的動詞の範囲で行われてきたのみであった。本研究は、小学部から中学部段階の年齢層の聴覚障害児群および健聴群を対象として、包括動詞と限定動詞という観点から、動詞の産出及び理解に関して実験的に検討を行ったものである。刺激語や実験方法についても様々な工夫を加え、聴覚障害児の結果と健聴児・者の結果とを量的、質的な面で比較している。その結果、聴覚障害児では、包括動詞の獲得は、基本的には健聴児とほぼ同様に進むが、限定動詞の獲得に困難をもつこと、また、聴覚障害児においては、限定動詞によっても、それが使われる文脈によって習得の状況が異なること、さらに、動詞の意味属性の捉え方が健聴児とは異なること等、彼らの動詞の習得について詳細な知見を得ることができた。本研究では、各個人の資料にみられる誤答等の分析や個人の基本的な心理的属性と動詞習得との関係にまで検討が進められていないが、これらの点について検討を加えることにより、さらに研究が発展することが期待される。

よって、著者は博士(教育学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。